

訪問日：2017.11.4 / エリア：京都

## こちかぜキッズダンス



上段左より) 阿比留さん、隅地さん / 下段左) 神前さん

回答者

隅地 菜歩さん(セレノグラフィカ代表・振付家・ダンサー)  
神前 沙織さん(NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークチーフ・コーディネーター)

阿比留 修一さん(同ダンサー)  
岡本 卓也さん(東山いきいき市民活動センター長)

### ダンスで子どもに向き合う理由

**神前** センターに来てくれる東山三条周辺地域の子どもの、言葉や行動にみられる問題を、2014年当時の東山いきいき市民活動センターの館長さんからお聞きし、ダンスの力を活かせるのではないかと2014年の6月からセンターの中にある三条学童保育所の子どもたちを対象にしたダンスのワークショップが始まりました。三条学童保育所にはこの地域の子どものしか在籍していないという事情があるようでした。セレノグラフィカは、子どもとのダンスの経験が豊富なアーティストで、プロジェクトと一緒に進めることになりました。

始めた時に、少なくとも学童の1年生が6年生になるまでは、このプロジェクトを続けようという目標を決めました。ただ単に継続を目指しているのではなく、セレノグラフィカの隅地さん阿比留さん、東山いきいき市民活動センター、子どもたちの写真を撮っていただいている草本利枝さん、アシスタントのダンサーたちも含めてプロジェクトメンバーを作り、三条学童保育所の先生方にもご意見を聞きつつ、プログラムを毎年変化させながら、活動を継続しています。

**隅地** なぜ継続するのかと聞かれたら、ここまで達成したからダンスはもう必要ない、ということはないと思っているからです。7月からワークショップを重ねて、秋の「まちづくりフェスタ」で発表することを、前半のワークショッププログラムの集大成にしています。でも発表は終わりではなく、次の活動に向けた新たなスタートになっています。

こちかぜキッズダンスは、まずはワークショップをやり、ではなく、子どもたちに何か名前があるといだらうと言って、みんなで話し合っ、東山というこの地域から吹く風という意味で「こちかぜ(東風)」と名付けました。

子どもたちの様子については事前に伺っていたけれど、直に子

どもたちに触れてみて、行動の若干の荒っぽさや叫び出すことで会話が成立しにくくなることを体験するまで、そのことを充分には理解していませんでした。

ただ、子どもたちが、他地域の子どもたちより劣っているのかというそうではないんです。子どもたちは荒っぽくても、生きようとする力が満ちていると感じます。アートに触れる機会は少ないかもしれませんが、こちかぜの活動を通して、自分のことを見る、見ることを通して人のことを感じるといった、身体感覚を養ってもらえたらと思っています。

**神前** 子どもは、自分が生きる環境を選べません。たまたま何かを得る機会が少ない場所・条件で生まれたとしても、異なる経験をできるように場を創るのが社会的なアートの役割の一つだと思います。活動に終わりが無いというのは、本当にそうだと思います。ゼロから種をまいてそれが少しずつ芽を出して咲いてくるような活動です。咲いたから満足ではなく、カラーや種類を増やしたいというふうに、一つの目標にたどり着いても、相手は人間だからこそ、次の年に追求したい目標と一緒に生まれてきます。

**阿比留** 活動の中で自己肯定ができない子どもたちに出会います。荒っぽい言葉を使う子どもが、実はコミュニケーションを求めているんだということが最初はなかなか分かりませんでした。ダンスの活動を卒業していく子どもたちもいるけど、道で会って話をして、ふらっと見に来たり、お祭りでも発表を見に来てくれたり、こちかぜの活動を気にしてくれているようです。子どもたちの変化は、良い方向に向かっていると思います。僕たちはたまたまダンスというツールを持っているから、彼らが育っていく、成長する過程に付き合うことができている、それが何より嬉しいことです。

半信半疑ながらも、三条学童保育所が活動をスタートさせてくれたから今があります。子どもたちと喧嘩をしながらでも、発表に向かっていくという土台はできたので、そこからまだやってい

2014年から京都市東山区・東山いきいき市民活動センターを拠点にスタートした、周辺地域の子どもたちとのコミュニティダンス・プロジェクト。ダンスや美術（衣裳・小道具づくり）のワークショップを継続し、地域のお祭りでの上演や公募ワークショップを行っている。

〒 605-0018  
京都市東山区三条通大橋東入  
2丁目下る巽町 442-9  
(東山いきいき市民活動センター内)  
TEL: 075-541-5151  
FAX: 075-531-4971

きたいことがたくさんあります。

### 地域にとってのこちかぜキッズダンス

**岡地** 保護者の方にも参加してもらえればと思い、親子ダンスワークショップを開催しています。初年度は、あまり積極的に参加してもらえませんでした。「まちづくりフェスタ」での発表も、最初は運動会やテレビで見えるような形がはっきりしているわけではない不思議なダンスに、見ていてびっくりされたと思います。でも3年目になって、観客席にいたお父さんから「こちかぜ日本一！」と言ってもらえました。子どもたちのダンスを受け入れてくださる雰囲気ですごく温かく、毎年の定番というか、地域のなかでアイドルのように感じました。

**岡本** 地域によって課題は様々ですが、子どもたちは自己表現や大人の気を引くために力技に走ったり、きつい言葉を発したりという手段を取ってしまいます。

ダンスという形で、気持ちや思いを表現することを知ってもらえるという点で活動には意味があると思っています。プロのダンサーに来てもらって、本物に接する機会があるというのも大切だと思います。大人に気持ちを聞いてもらえ、表現の仕方も多様になっていきます。

僕はダンスのワークショップの時間だけでなく、日々学童の時間にセンターの中や、学童の後でもセンターの周りで子どもたちに会っています。毎日の触れ合いの中で、子どもたちの様子が変化しているのを感じています。ダンスのことが会話の中に出てくるし、自信になっている様子が分かります。子どもたちは自分たちの振る舞いを制御できるようになったように感じますし、僕が悪さをしている子どもに向かって少し声を荒げてしまったことに対して、その様子を見ていた子が、そういう言葉使っちゃダメだよとむしろ言葉遣いを注意されることもありました。

保護者の方にも発表の場が設けられていることで、いい理解を得られています。センター近隣の方からも今年は何やるの、楽しみだ、という声も聞きます。

私たちはダンスの活動を通して、子どもたちの自発的な成長が見られればいいと思っています。例えば踊らないのも自己表現の一つ、それでもそこにいいと考えています。けれども学童の先生たちは踊りなさいと指導をされるときもあるように、学童保育の教育方針と僕たちの考えていたことが衝突する時もあります。お互いの考えていることを共有するために、先生たちとの話し合いを続けながら、活動を進めてきました。

### 活動運営の中で感じる課題

**神前** 今は助成金で運営しています。助成がなければ活動が成り立たなくなるという状況は課題だと思いますが、今はそれしか方法がないです。常に悩む点ではありますが、ワークショップの参加費をいただくとうると、それだけで参加してもらえなくなる可能性が大きいので、収入が得にくいのです。続けることが大事なので、助成金を組み合わせて、活動を継続すること、そして取組をビジュアル化して、成長の記録を残すため、草本さんが撮影した写真を「三条まちづくりフェスタ」で展示したり、毎年報告書とセットにして、フォトブックにまとめることを続けています。

地域活動のための助成金は期限付きのものも多く、継続したいのにできない難しさもあります。少なくとも10年位のスパンで継続して活動助成をいただけるような仕組みなどを、京都市が考えてくれるといいなと思います。また、そのような助成を専門家の目で判断し、必要なところに資金を回しやすくする仕組みとして、地域課題に取り組む民間団体をサポートするためのファンドを地域企業等と創設するなど。また、経済的なサポートだけではなく、ゆくゆくは一緒にこうした事業を行えるのが理想だと思います。